
また、会えるよ。

三日月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また、会えるよ。

【Nコード】

N9324A

【作者名】

三日月

【あらすじ】

私は彼に恋をしていた。届かないことも、届いちゃいけないことも、わかってた。それでもこの想いは捨てられなかった。彼が好きだったから…

第一話：恋

「また会えるよ」

呪文のように繰り返した。

また会えるよ、また会えるよ…

何度も何度も繰り返していた。まるで自分に言い聞かせるように…

彼と出逢ったのは、よく晴れた金曜日、春の終わりの頃。

彼は不思議な人だった。彼の澄んだ瞳は、まるで私の想いをすべて見透かしているようで、私はいつも、彼の瞳をまっすぐに見ることができなかった。

私は彼に恋をしていた。だけど私は、彼のことを何も知らない。誕生日も血液型も、何が好きで何が嫌いなのかも、何も知らない。だけどそんなことはどうでもよかった。彼の優しさを知っていたから。彼はいつも優しくかったから。

それだけでよかった。

第二話：出逢い

彼と出逢ったのは、小さな水族館。そこは無料の水族館で、かなり前からあるらしくやけに古びていて、いつもガラガラだった。でも私はその雰囲気が好きで、暇さえあれば遊びに行った。

何度も通う内に、係りのお兄さんとも顔見知りになっていた。

「こんにちは」

「今日はエマの調子いいから、ゆっくりしてって」

「ありがとう」

エマとはこの水族館の看板イルカで、私はエマが大好きだった。

この日もいつものようにエマの水槽の前に座った。エマは私が行くといつもこちらへ泳いできてくれる。エマは賢いから、私のことがわかるんだと、係りのお兄さんは言っていた。私はいつもエマに語りかける。つらい事や悲しい事、嬉しかった事。エマは私の疲れた心を、いつも癒してくれた。

すると、エマの水槽の中に人影が見えた。

「…誰？」

エマの担当は、いつものお兄さん一人だけのはず。それでなくてもこの水族館は従業員が少ないから、ほとんどの人は知っている。

「あの人は誰？」

私はエマに近づいてそう言った。

するとエマはその人の方に泳いでいき、まるでその人を紹介した

がっているかのように、私の所まで連れてきた。

楽しそうにエマと泳ぐ人。その人が彼だった。彼はエマと私を交互に見つめ、そして優しく笑った。

私は軽く会釈をし、エマにバイバイをしてその場を去った。

- 新しい人が入ったのかな -
初めはその程度の印象しかなかった。けれど、彼との出逢いがその後の私を大きく変えた。

それはきっと、エマだけが知っていた。

第三話：ショー

ある日、いつもと同じようにエマに会いに行くと、エマの水槽にポスターが掲示されていた。

《みんなの人気者エマ！》

《星空の下のイルカショー！！》

・エマがショーやるんだ…・

オープン当初にエマがショーをやっていた話は聞いたことあったけれど、実際に見たことはなかった。

「エマ、ショー頑張ってね」

「ちゃんと見に来るからね」

そして水槽の中には、彼がいた。彼はじっとこちらを見て、にっこりと微笑んでいた。

・何なんだろう、あの人…・

そしてショー当日。エマのショーは夜に開催され、まさしく《星空の下のイルカショー》だった。客足の乏しい水族館が、話題性を考えての開催だったのだろう。

そんな話題性が幸いしたのか、客の入りはますますだった。

そしてショーが始まり、エマの相棒として登場したのは、彼だっ

た。

いつもは水槽の中で、しかもマスクとゴーグルを付けた彼しか見たことなかったが、雰囲気ですぐに彼だとわかった。

「あのお兄さん男前ね！」

「かつこいー！」

客席からはそんな声が聞こえていた。

・お兄さんよりエマを見てよ…・

私は少し苛立ちながら、ショーを見ていた。

初めて見るエマのショーは、期待以上のものだった。

エマの美しいジャンプや、星空とライトに照らされた水しぶき。そしてエマと彼が水面で同時に宙返りをする。すべてが美しく、キラキラしていた。今までに見たことのないイルカショーだった。

「また次のショーも見に来よ！」

「あの子がすごかったね！！」

「あのお兄さんもすごかった！」

そんな声を聞きながら、私も大満足だった。

そしてほとんどのお客が会場を出た頃。私はまだエマを見ていた。

「エマかつこよかったよ」

そう言って水槽に戻るエマを見送った。

するとエマが突然大きくジャンプをした。

その先では彼が、大きな声で叫んでいた。

「
ありがとう!」

そしていつものように、優しく笑っていた。

第四話：気持ち

それからエマのショーは定期的に開催された。評判はかなりよく、水族館も週末には結構な賑わいを見せるようになっていた。

…が、私はというと、急に仕事が忙しくなり、ストレスに潰されそうな日々を送っていた。エマのショーはおろか、水族館へ行くことさえできていなかった。

かろうじて都合がついた時でさえ、最後の方をちらっと見る程度だった。

そんな日々が一ヶ月以上続いたある日…

その日もいつもと同じように、ショーが終盤に近づいた頃水族館に到着した。私はいつもと同じ、後ろの方の席でおとなしくショーを見ていた。

ショーが終わり、エマと彼はいつものようにゆっくり水槽を泳ぎ、客の歓声に応えていた。

その時だった。彼がこちらに手を振った。

- えっ… -

一瞬ドキッとしたが、すぐに平静を装った。 - 別に私に振ったんじゃないよ… -

その時からだった。彼のことが気になりだしたのは。

それからというもの、ショー中にも、彼を目で追うようになっていた。もちろんエマのことは大好きだし、ショーの一番の目的はエマ。それは変わらないのに、彼が気になって仕方なかった。

私はいつからか、彼に恋をしていた。

名前も知らないのに。話をしたこともないのに。

だけど私は、確かに恋をしていたんだ。

エマが出逢わせてくれた。この恋はエマが教えてくれたんだ。

私は彼に恋をして知った。恋がこんなにも切ないものだ。こんなにも苦しいものだ。

だけど、私は彼に恋をして知った。恋がこんなにも幸せなことだと。こんなにも素敵なことなんだと…

第五話：言葉

それから二ヶ月後。私はやっと穏やかな日常を取り戻した。

・これでまた水族館へ行ける・

久しぶりにゆっくりと訪れる水族館。やはり平日は閑散としているけれど、私はこの方が好き。落ち着いてエマを見れるから。エマに話したいことも沢山ある。

「久しぶりだね、エマ」

エマはいつものようにこちらへ泳いできてくれた。

「ずっと仕事が忙しくってね、もうたくさんだったよ」
そう言いながら、私は何気なく水槽の中を見渡した。が、彼の姿はなかった。

「なんであんなに気になるんだろうね」

「話したこともないのに、変だよ」

「こんにちは」

聞き覚えのない声がして、私は振り返った。

そこには彼がいた。

「あ…こ、こんにちは」

彼はいつものように優しく微笑んでいた。

「エマのこと好きなんだね」

「いつも来てくれてるよね？」

「あ…はい…」

「でも最近は仕事が忙しくて…」

「あー…だから最近あんまり来てないんだね」

「時間ある時はショーは見に来るんですけど…」

「うん、知ってる。いつもすぐわかる」

私は何も言えなくなってしまった。前から彼は私を知ってくれていたんだ。ショーの最後、彼は私に手を振ってくれていたんだ。彼はいつも、私を見つけてくれていた。そう思うと、何かが胸の中にこみ上げてきた。

そして彼はこう言った。

「エマってさ、すごく優しいんだよね」

「俺が落ち込んでる時とかわかるみたいで」

「エマと泳いでると元気になれるんだ」

「私も…エマを見てると元気になれます」

「エマも君が来ると元気になるよ」

彼は優しく言った。

「休みになったらまた来てね」

「俺が元気をあげるから！」

「あ、俺じゃなくてエマか（笑）」

そう言つと彼は、ミーティングの時間だと言つて戻つていった。

初めて話した彼は、とても気さくで、まるで前からの知り合いのようだった。けれど、言葉の一つ一つが優しく、温かった。

彼が去つた後、私は彼の言葉を一つ一つ思い返していた。

『いつもすぐわかる』

『俺が元気をあげるから！』

今まで、冗談でも言われたことないような言葉ばかりを言い放つ彼。

- 不思議な人…… -

私はエマに近づき、そつと呟いた。

「エマ、私…あの人のこと好きになるかも…」

「いいのかな…」

エマはいつもと変わらず、楽しそうに泳いでいた。

第六話：名前

名前も知らない人に恋をするなんて、考えられない。そもそもこれが恋なのかもよくわからない。そんなことばかり考えていた。

だけど彼のことを思い出すと、なんとなく浮ついた気持ちになる。まるで初恋みたいに。

それから、水族館へ行くと彼はよく話しかけてきてくれた。けれどもいつも名前を聞くこともできず、会話はいつもエマのことばかり。今まで知らなかったエマの話を聞けて、それはそれで嬉しいけれども、なんとなく物足りない。

ある日、エマの水槽の前になると、突然携帯が鳴った。

「げっ…会社からだ…」

嫌な予感は的中し、私は会社呼び戻された。

「また仕事だよ…」

「また来るね、エマ」

急いで水族館を出ようとした時、もの凄い勢いで誰かとぶつかった。

…彼だ。

「ご、ごめんなさい!」

私は動揺しつつも、ぶちまけたカバンの中身を広い集め、足早にその場を去った。

そして会社へ戻り依頼された仕事の処理を始めようとした時、気がついた。

- 名札がない... -

仕事中は名札をつけることが原則で、特にうちの上司は名札着用
に厳しかった。

きつとカバンを落とした時に名札も落としたのだろう。でも明日
は水族館へ行けそうにない。

- 取りに行きたいけどしばらくは無理だな... -

とりあえずは、新しい名札の制作願いを出し、その場をしのいだ。

それから更に二週間後。

近頃はめつきり水族館へ行く回数が減った。

- こんなんじゃないやすぐあの人に忘れられちゃうな -

そんなことを思いながらエマの水槽の前に座っていた。

「ミワコ!」

振り返ると彼がいた。

彼が私の名前を呼んでいた。手には私が落とした名札を持っていた。

「さつき入り口で見かけたから」

「これこないだ落としてったよ」

「ありがとう……」

私は動揺を隠せずにいた。

彼が私の名前を呼んだ。しかもかなり親しげに。それだけでも驚きだけでも、私が動揺したのにはもうひとつ理由があった。

私は自分の名前が嫌いだった。昔から、誰も私を名前では呼ばない。

大抵、あだ名や名字で呼ばれる。親や兄弟でさえも愛称で呼ぶため、私は今まで名前を呼ばれた記憶がなかった。むしろ、自分の名前が気に入らなかった。

そんな私の名前を、彼は呼んだ。

変な感じがしたけれど、なぜだか嬉しかった。

今までは大嫌いだったのに。人の名前を羨んばかりいたのに。

「あのっ……」

「お名前、何て言うんですか……」

「アサノ」

彼は優しく言った。

少しずつ、ほんの少しずつ、何かが変わっていくのがわかった。

私の中で、何かが変わっていった。

第七話：関係

「アサノさんかあ……」

彼に名前を聞いたあの日から、更に私は彼にハマっていた。

彼は話をする時、必ず相手の目を見る。それは人として当然の行為なのけれども、私はそれがすごく恥ずかしかった。彼に見つめられると、まるで心の中までも見透かされているような気持ちになる。

だから私はいつも下ばかり向いていた。彼の瞳をまっすぐ見つめることが、どうしてもできなかったから。

それでも彼は、いつも私を見ていてくれた。こんな私を、いつもまっすぐに。

それからの日々は、とても足早に過ぎていき、季節は冬。その頃にはエマの係りをしていたお兄さんともだいぶ仲良くなり、水族館へ行くと、よく三人で話をした。

同じ時間を過ごせばその分、もっと彼を好きになった。彼の仕草が、笑顔が、すべてが愛おしかった。

けれどそれは、恋とは少し違っていたのかもしれない。彼とつき合いたい、とか、彼とデートがしたい、とか、そんなんじゃないかった。ただ、こうして話せることが嬉しかった。そばにいれるだけで

満たされていた。

そして、同じ時間を過ごせばその分、彼のことがわからなくなった。彼はきつと私の気持ちに気づいている。それでもいつもと変わらない。受け入れるでも、突き放すでもない。

私達はいつも平行線を辿っていた。

考えてみれば、おかしい関係だ。友達でもない、恋人でもない。連絡先も知らないし、水族館でしか会ったこともない。

ただど会う度に惹かれていく。彼は本当に不思議な人だった。

そして私の心は、いつしか彼でいっぱいになっていった。

ある雨の日。水族館へ行くと、入り口の前で偶然学生時代の友人に会った。その友人は、私の数少ない友達の中でも特に心を許せる仲で、気の合う男友達だった。再会の喜びと懐かしさで、私はごくはしゃいでいた。

その時、彼が入り口付近を通りかかった。彼はちらっとこちらを見て、そしてすぐに通り過ぎた。

友人と別れ、いつものようにエマの水槽へと向かった。しばらくしても、今日はなかなか彼が現れない。

- 忙しいのかな... -

するとそこへ彼といつものお兄さんが通りかかった。

しかし彼はこちらをちらりとも見ずに通り過ぎた。

- えっ… -

無視された。完全に無視された。でもなんで？今まであんな態度とられたことなんてない。彼に悪いことをした覚えもない。

- なんで… -

「ケンカでもしたの?!」

一番驚いていたのはお兄さんの方だった。

「ケンカなんてしてないです…」

どうしてあんな態度をとられたのか、見当もつかなかった。

結局その日、彼は私と目を合わせることはなかった。

私の存在に気づいていないはずなんてない。明らかに避けられている。でも、なぜ？

言いようのない不安と、避けられたことの悲しみは、徐々に怒りを増してきた。

- ありえない -

- 私が何した? -

- 今日、話したかったのに… -

彼に対する怒りはまた悲しみに変わり、その夜一人で泣いた。

その翌日、水族館へは行けなかった。

また無視されたら、また避けられたら……

そう考えると、とてもじゃないけど行けやしない。今日はまっすぐ帰ろう、そう思い家路についた。

駅前を歩いていると、背後から声をかけられた。

「ああ、お兄さん……」

「今帰り？」

私の気まずそうな表情を見て、お兄さんは言った。

「昨日一緒にいた人、彼氏？」

昨日？一緒にいた人？一瞬何のことだかわからなかったが、すぐに思い出した。

「あれはただの幼なじみです……」

「そうなの？」

「でもアサノさんは彼氏だと思ったみたいだけど」

「あんなに楽しそうにはしゃぐ君は見たことないって」

「だから昨日あんな態度とっちゃったんじゃない？」

「要するにヤキモチ？」

「まあ……愛されてるって事で許してあげてよ」

そう言うとお兄さんは軽く笑い、去っていった。

私は頭の中が混乱していた。

- 彼氏？ヤキモチ？ -

- いったい何の話？ -

わけがわからなかった。

確かに、今まで彼の前でははしゃいだことなんてないし、はしゃげるはずもない。

いつも下ばかり向いてしまうから、つまらなそうに見えたかもしれない。

だけど、それとこれとは別の問題だ。

そもそも私達はヤキモチを妬くような関係なんかじゃない。それを理由に冷たくされるような関係なんかじゃないのに。

『愛されてる』ってなんだろう。

だったら受け入れてほしいよ。私だけを見てほしいよ。

それができないなら、いつそ突き放してよ。この想いが強くなる前に…。

やさしくするから、好きになっってしまうんだよ？

私はどうしたらいいの？私たちの関係は、いったい何？

彼は私のこと、どう思ってるの？

いろんな思いが、頭の中を交差していた。

…だけど、この関係を壊したくなかったのは、きっと私の方だった…。私は弱虫だったから。

私にもう少し、強かったら……………

第八話：想い

『愛されてるってことで……』

あの日以来、お兄さんの言葉が頭を離れなかった。

- 彼が私を好き…？ -

- まさかそんな… -

彼が私を想っていてくれるのなら、これほど嬉しい事はない。だけど、それはありえないことだった。

彼は私を嫌いではないだろう。けれど、それは特別な感情ではない。もし万が一にもそうだとしたら、彼は自分からアプローチしてくるはず。彼はそういう性格だから。

「ありえない話だよね」

私は涙を流していた。

彼を想うと胸が苦しくなる。わけもなく泣きたくなる。ただ好きでいることが、これほど難しいことなのだろうか。

今までだって、恋をしてきた。失恋だってした。だけどこの恋は、何かが違っていた。彼だけは失いたくなかった。

好きすぎたから。きつと、好きになりすぎたんだ。

そして私はいつものように、水族館へ行った。エマはいつもと変

わらず元気そうに泳いでいた。

「こんにちは」

彼もまた、いつもと変わらず優しく笑っていた。

「ちよっぴり久々だね」

お互いあの日のことには触れなかった。まるで何事もなかったかのように、いつも通りの二人だった。それでよかった。私達がギクシヤクすることなんて何もないのだから。

その後しばらく彼と話をし、水族館を出た後、その日は珍しく寄り道をしてから駅へと向かった。

「ちよつと遅くなっちゃったな」

いつもは夕暮れ時には帰るのだが、あたりはもう真っ暗になっていた。

駅へと向かう途中、女の人が声をかけてきた。

「水族館に行きたいんですけど……」

水族館までの行き方を教えると、女性はありがとう、と言って足早にその場を去った。

「こんな時間になにしに行くんだろ」
「もう閉まつてるよね？」

不思議に思いながらも、その女性のことなど気にもとめなかった。

そして数日後。町はクリスマス気分でいっぱいになっていた。

- もうすぐクリスマスか -

クリスマスは、エマのショーもクリスマスバージョンをやるらしい。私はそれが楽しみだった。

- 早くクリスマスにならないかな -

クリスマスのショーを間近に控え、リハーサルを繰り返しているのか、エマは水槽を空けることが多くなった。まあ、お客さんなんていつも私ぐらいだから、営業に差し支えはないだろうが。しかもエマがいらないという事は彼もいない。寂しかったけれど、クリスマスには会える。それまでの辛抱だった。

そしてクリスマスイブ。その日は仕事が長引き時間も遅かったため、水族館へは立ち寄らずに帰った。

その帰り道。駅前はいつもとより混雑していた。

- イブだからってこんなに混まなくても... -

人混みに苛立ちながらも家路を急いだ。

その時だった。

「アサノさん？」

人混みの中で彼を見かけた。よく見ると、誰かいる。

…女の人だ。私はその場に立ち尽くした。

彼が女の人と一緒にいる。恋人？奥さん？…今まで考えたこともなかった。彼が独り身だとは限らないのに。

今日はクリスマスイブだ。彼がデートしてたって別に不思議なことなんてない。彼に恋人がいてもおかしくない。結婚してもおかしくない。

それにあの人は、あの時の女の人だ。あの夜、水族館への道を聞いてきたあの人。暗くてよく見えないけれど、間違いない。あの日、きっと彼を迎えに行ったのだろっ。そう考えるとつじつまが合う。

「そっかぁ…そうだよね…」

「あんな素敵な人がひとりなわけないよね…」

私は涙が止まらなかった。そして誰にも涙を見られないように、その場を走り去った。

ただただ涙が溢れてきた。どうしようもなかった。私はもう、彼を好きでいちゃいけない。

第九話：願い

クリスマス、ショー当日。朝目が覚めると、私の目は真っ赤に腫れていた。昨日は一晩中泣いたから。

- 今日が日曜でよかった... -

こんな顔じゃ会社になんて行けない。それに仕事だって手につかないだろう。

今日のエマのショー... ずっと楽しみにしてきた。だけど、私はちゃんと観れるだろうか。

彼には恋人がいた。もしかしたら奥さんかもしれない。彼に直接確かめたわけではないから、真相は分からないけれど。どっちにしろ、彼は私の手の届く人ではなくなった。いや、届いてはいけな
んだ。

だけど、それがどうしたというのだろう。元々そんなことを望んでいたわけではないじゃない。

私はエマが好きで、彼はエマのトレーナーで、ショーや水族館を通じて知り合っただけ。私は彼が好きだったけれど、つき合いた
いとかじゃなかったはず。

だったらいいじゃない、彼に相手がいても。

わかってる。わかってるよ。

けどどうしても胸が苦しい。叶わない恋と知ってしまった。この想いをどうすればいいというのだろう。

ただ苦しくて、もう涙も出なかった。

そうこうしている間にエマのショーの時間は近づき、私は水族館へと向かった。

クリスマスソングと鮮やかな電飾に彩られ、会場はとてもキラキラしていた。

いつものように、エマと彼の息のあった演技。そして花火が私の胸一杯に広がっていくようだった。

私は精一杯、彼を見つめた。苦しかったけど、それでも彼を見つめていた。

私はエマが好き。そして彼が好き。その気持ちは変わらない。そう、それでいいんだ。

この想いは捨てられない。私は彼が好きだから…

手に入らなくていい。届かなくていい。だから、好きでいさせてください。

選ばなくてもいい。特別じゃなくてもいい。だからお願い。好きでいさせてください…。

クリスマスの夜、いつもと変わらない優しい微笑みで手を振る彼
を見つめながら、そう願った。

第十話：手

クリスマスが過ぎると、世間は冬休み。けれど、水族館は相変わらず閑散としていた。

いつものようにエマの水槽に向かうと、すでに彼が水槽の前のベンチに座っていた。彼は何も言わずに微笑んだ。私も何も言わずに彼のそばに座った。

しばしの沈黙の後、彼が何か言いたげにこちらを向いた、その時、辺りの電気が消えた。

「停電???！」

「ブレーカー?…じゃなさそうだな」

「水槽の電気がつくって事は、この辺りで停電か」

この水族館では水槽の電気や酸素等は自家発電で賄っているらしく、辺りで停電が起きても大丈夫な仕組みになっているらしい。

「とりあえず復旧待つか」

思わぬアクシデントに見舞われたが、薄暗い中、エマの水槽から放たれる淡い光がとても幻想的で美しかった。

「なんかきれい…」

そう言った私を見て、彼は優しく笑った。

このまま時間が止まればいいのにと、本気で思った。この時が永遠に続けばと、心の中で呟いていた。

しかしいくら待ってみても復旧する気配はなかった。

「長いな……」

「ちよつと様子見てくるよ」

「えっ……」

私はつい、不満そうな声を上げてしまった。

しまった！と思っててももう遅い。何とかごまかそうと考えていると、彼が言った。

「一人じゃ怖い？」

何も応えずにしていると、続けて言った。

「じゃあおいで」

「一緒に行こう」

薄暗くて表情こそ見えなかったが、とても優しい声で。

私は黙って彼の後をついていった。

事務所へと向かう途中、私達は一言も喋らなかった。薄暗い中、沈黙を保ったまま歩いていた。

「ひゃあっ！！」

私は間抜けな声を発しながら転んでしまった。

「大丈夫?!」

こんな時に転ぶなんてかつこわるい…そう思つと頭はパニックだった。

心配する彼をよそに、慌てて立ち上がろうとするが、慌てすぎてうまく立てない。それどころか、何度も転ぶ始末。

・もう最悪…・

「大人しく待つてればよかった…」

半泣き状態でぼつりと呟いた。

すると彼はふつと笑い、優しく言った。

「ほら、おいで」

そして手をさしのべてくれた。

私はぼーっとその手を見つめた。手を取ることも、返事をすることもできずにいた。

彼は、やれやれという顔をしてそつと私の手を取った。やつとこのことで立ち上がった私は、俯いたまま小さくありがとうと呟いた。

「また転ぶから、このまま行くよ」

「え……」

彼は私の手を握ったまま歩きだした。

「もう離しません」

そう言っただけはいたずらに笑った。

私は言い返すこともできず、ただ下を向いてあるいた。

ほんの少しだけ、涙を流しながら。

彼の言葉はいつも私を混乱させる。何が本当で何が嘘かわからない。

だけどきつと、どれも本当でどれも嘘じゃない。たとえ嘘であってもかまわない。私はいつも彼の言葉に救われたから。

彼がくれた言葉は、全部が私の宝物だった。

だけど彼はきつと知らない。何気ない言葉に私がどれほど救われ、元気になれているか。

そして何気ない冗談に喜び、時に傷ついていることも……

今私の手を引いているこの手は、私だけのものじゃない。だけど、今、この瞬間だけは、私のものでいてほしい。そんなワガママなことばかり考えていた。

初めてつないだ彼の手は、とても大きくて温かった。強く握られたその手が離れないように、ぎゅっと彼の手を握りしめていた。

今歩いているこの道が、ずっと続けばいいのに。電気なんかつかなくていい、ずっと停電でいい。そうすれば彼はずっと手をつないでいてくれる。ずっとそばにいてくれる。

『もう離しません』なんてとっさの出任せで、いつもの冗談。わかってる。そんな言葉を信じるほどバカじゃない。

だけど、嬉しかった。冗談でも、嬉しかったんだ…。

しばらくすると事務所に到着した。

- …… もう着いちゃった -

彼がドアを開けると、中にはいつものお兄さんがいた。懐中電灯片手になにやら電話をしていた。

「あ、アサノさん！」

「今問い合わせてるんですけど、復旧する気配ないっすよ」

「なんか電線がどうたらこうたら……」

お兄さんは話をしながら私達が手をつないでいることに気がついた。そして何も言わずに、にこっと私に笑いかけた。まるで『よかったね』とでも言いたそうに…

「じゃあ私帰ります」

なんとなく気まづくなってしまう、私はそう言った。

その時、彼の携帯が鳴った。

「あ、もしもし…」

「うん、停電…」

「…そっちは？」

あの人だ。きっと電話の相手はあの人。直感だけど、わかる。その瞬間、また泣きそうになってしまったが、必死にこらえていた。まだつながれたままの手が、なんとなく虚しかった。

彼は手短に電話を切ると、出口まで送ると言ってくれたが、私はそれを拒否した。

「一人で大丈夫です」

「でもまた転……」

彼が全部言い終える前に、私は彼の手をふりほどいた。

一瞬彼の表情が曇ったのがわかった。

「あ…ごめんなさい…」

彼は何も言わなかった。

私は平謝りをしてその場を走り去った。

- 最低なことしちゃった…… -

彼は何も悪くない。それなのにあんな態度をとってしまった。

強く握りしめてくれていた手を、ふりほどいてしまった。

- だって…… -

心の中でいいわけをしようとする自分がいたが、何も言葉が出てこなかった。

私は最低だ。自分の勝手なワガママで、彼の好意を踏みにじってしまった。

事務所から走ってすぐ、エマの水槽に着いた。エマはいつものように泳いでいた。

「エマ……」

「私もう、どうしたらいいかわかんない……」

涙が止まらず、エマの水槽にもたれて泣いた。

帰り際の真っ暗な帰り道、私に残っていたのは、ひどい罪悪感と嫌悪感。そして彼の手の温もりが、右手に残った…。

第十一話：迷路

それから数日間、私は仕事が手に着かなかった。

- 彼はどう思ったかな… -

- いい加減愛想尽かされちゃうかな… -

そんなことばかり考え、ため息については右手を眺めていた。

- おつきい手だったな… -

もう一度手をつないでくれたら今度こそ、その手を離さないのに。
もう二度と、ふりほどいたりしないのに。

なんて、そんなことばかり考えててもどうにもならないのはわかってる。やっぱり、もう一度謝りに行こう。このままじゃいけない。
このまま彼に嫌われたくないから。

どんなに苦しくても、ツラくても、やっぱり彼が好き。好きで好きで仕方なかった。叶わない恋でも、届かない想いでも……

そして数日後、私は水族館へと足を運んだ。エマの水槽へ行くと、
彼が水槽のガラスを磨いているところだった。

「あ……こんにちは」

私は精一杯の笑顔で挨拶をした。…が、彼は軽く会釈をただけだった。なんとなく不機嫌そうにも見える。間が悪かったかとも思

ったけれど、でもいつもの彼はそんな態度をとったりはしないはず。

- やっぱり怒ってるのかな... -

私はそれ以上声をかけることができず、黙ってベンチに腰掛けた。

しばらく彼の後ろ姿を眺めていたが、明らかに雰囲気がいつもと違う。というよりも、怖い。こんな彼は見たことがない。いつもならチラチラこちらを振り返ったり、にこにこしながら話しかけてくるのに。

その時、いつものお兄さんが通りかかった。すると彼は楽しそうにお兄さんに話しかけた。楽しそうな二人。さっきまでの重苦しい雰囲気が嘘のように、彼は笑ってる。

明らかに態度が違う彼に、私は戸惑いを隠せなかった。

お兄さんが過ぎ去った後、何人かお客さんが通りかかった。彼は愛想良く対応していた。けれど、いくら経っても私の方を振り向くことはしなかった。

何度か話しかけようとしたが、何も言葉が出ない。いつもみたいに話しかけてくれなきや喋れない。私はいつも、彼の問いかけに返事をするだけだったから。

そうしている間に彼は作業を終え、こちらを振り返った。

それでも私は言葉が出てこない。話したいことはいっぱいあるはずなのに、謝りたいことだってあるのに、うまく言葉が出てこない。意気地なし、根性なし。こんな自分が嫌い...

私は彼から目をそらした。彼の瞳を見ることができなかったから。彼は何も言わなかった。そして彼は少し俯きながら、こちらへ歩いてきた。

- どうしよう... -

私はどうしたらいいかわからなかった。謝るなんてもうできない。怖い。彼が怖い。突然無視されたあの雨の日よりも、ずっと怖い。怒ってるのかそんなんじゃないのはわかってる。だけど何か怖い。

私はいつの間にかその場を離れていた。

どうしてだろう。彼のことからなくなった。好きな気持ちは変わらないのに。彼をまっすぐ見れなくなっていた。

そんな私の態度が、どれほど彼を傷つけただろう。その時は思いもしなかった。ただ、自分のことで精一杯だった。

私は迷路に迷い込んだように、水族館の中をふらふらと彷徨っていた。

見慣れたはずの水族館が、なぜだか知らない土地のように思えて寂しかった…。

第十二話：優しさ

しばらく水族館をウロウロした後、エマの水槽へと戻った。彼はもうそこにはいなかった。

「エマ……」

「もうやだよ……」

大粒の涙を流しながら水槽に寄りかかった。いつもは近寄ってきてくれるエマも、今日は遠くを泳いだままだった。

「エマもいい加減愛想が尽きるよね……」

なんで私はこうなんだろう。いつも素直になれなくて、ワガママで自分勝手で。いつも自分のことしか見えてない。そんなんじゃない。つまで経っても彼と向き合うことなんて出来やしない……。

その夜、私は夢を見た。真っ暗な空間にガラスの階段がぼつりと浮かんでいて、一カ所だけスポットライトが当たっていた。その先には彼がいて、彼はほとんど階段を上っていく。私は必死で追いかけようとするが、階段に足をかけることが出来ない。その間にも彼はどんどん進んで行く。

待つて、待つて、行かないで、行かないで。声にならない声で叫び続けた。声を出すことも追いかけることもできなかった。

目が覚めると顔は涙でぐちゃぐちゃだった。

- イヤな夢…… -

だけど、あれはただの夢なんかじゃない。あれは未来の私だ。そう思った。

このままだと、本当に彼は離れていってしまう。私が変わらない限り、彼と向き合うどころか、笑い合うことさえ出来なくなる。このままじゃいけない。このままじゃいけないんだ。

その日、仕事が終わるとすぐに水族館へ向かった。どうすればいいかはいまだにわからなかったが、とりあえず彼に謝りたい。そう思ったから。

水族館へ着くと、もうすでに閉館後だった。でも中の電気はまだついてる。彼はまだ中にいる。しばらく待つことにした。

門に寄りかかりながら彼を待った。冬の夜風はとても冷たい。だけど、いつまでも待てる気がした。彼に会えるなら。いつまでだって待っていられると思った。彼が笑ってくれるなら。

謝りたいとか、変わりたいとか、そんなのは口実だったのかもしれない。私は彼に会いたかった。ただ、会いたかった…。

一時間経っても彼は出てこない。いい加減寒さが応えてきた。

- もう帰っちゃったのかな…… -

ちよつとだけ悲しくなってきたその時、彼が出てきた。

彼はすぐに私に気づいた。

「ミワコ?!」

「何してんのこんなところで!」

「…待ってました」

震える声で小さく言った。それが精一杯だった。

彼はそれ以上何も言わず、私の手を取り優しく言った。

「もう…冷たい手して…」

「あ、俺も冷たいか…」

そう言ってふっと笑い、私の手を包んでくれた。

私は泣いていた。どうして彼はこんなに優しいんだろう。優しくすぎるよ。どうしてそんなに優しくしてくれるの？ 優しくすぎてツライよ…。

冷たくなんかない。冷たくなんかないよ。彼の手は誰よりも温かい。いつも私を暖めてくれる。誰よりも温かい、魔法みたいな手…。

そして彼は小さく呟いた。

「もう来てくれないんじゃないかと思った…」

私ははっとした。私の身勝手な行動が、彼を傷つけたんだ。彼も悩んだ。彼だって悩んでいたんだ。

「ごめんなさい…」

私は下を向いたまま小さく言った。

「ちょっとだけ…怖かったから…」
「だから…逃げちゃったんです…」

「怖かったって…何が…？」

「アサノさんが……」

彼はよくわからないような顔をしていた。そして今までに見せたことのない、とても優しい表情で言った。

「怖くないよ？」

私は涙が止まらなかった。私は最低だ。自分の勝手な思いこみで勝手に傷ついて、そして人を傷つけた。

「ごめんなさい……」

私は何度も彼に謝った。

すると中から他の従業員が出てきた。こんな所誰かに見られると、彼が誤解されてしまう。私はその場を離れようとした。

彼は駆け出そうとした私の腕をつかみ、私の目をじっと見つめた。

「怖がらせちゃってごめんね……」

私は首を横に振り、走り出した。

私は何もわかってなかった。何一つ、わかってなかった。

どうして気づけなかったんだろう。彼の優しさに。彼はいつも優しくかったのに。彼はいつも、私のことを考えててくれたのに。

何も見えてなかった。自分のことしか考えられなかった。彼の優しささえ見失ってた。

私は彼を傷つけた。彼の優しさを踏みにじってた。彼はあんなに優しくかったのに。

どうして彼は、こんな私に優しくしてくれるんだろう。

もう優しくなくていいよ。私はきつとまた、彼を傷つけるから。もう私には優しくなくていい。私はまた、彼に甘えてしまうから。

私は彼にとって、どんな存在なんだろう。優しくする価値のある存在なのだろうか…

私はぼんやりと、夜空を見上げた。

彼の手は今日も温かった。

第十三話：絶望

「今日で今年も終わりかあ……」

大晦日のこの日、そんなことをつぶやきながらも、私は部屋の大掃除に励んでいた。

机の引き出しを整理していると、名札が目に入った。まだ出会ったばかりの頃、彼が拾ってくれた名札。もしこの名札を落とさなければ、きっと彼が名前を呼んでくれることも、彼の名前を知ることもなかっただろう。

そう思うと、この名札に感謝せずにはいらなかった。

・来年も楽しくなりますように・

そう小さく願いながら、名札をしまい引き出しを閉めた。

年末年始の一週間、水族館はお休み。早くお正月が終わればいいのに、なんて、お正月を迎える前からそんなことばかり考えていた。

何よりも私は彼に会いたかったから。いつしか、私の毎日はそれがすべてだった。

そして年は明け、新しい年が始まった。つまらないお正月の三日も過ぎ、私は仕事始めを迎えていた。

・また仕事かあ……・

憂鬱な顔をしながらデスクにつくと、突然課長に呼び出された。

この時、なにやら胸騒ぎがした。何か、とても悪い予感がした。失敗でもしたかと、そんなことを考えながらも課長の待つ会議室へと向かった。

「何か……？」

「年明け早々呼び出したりなんかしてすまないね」

「実は異動の内示が出てね…」

「異動……」

「私、部署変わるんですか？」

正直、異動はしたくなかった。同僚も上司もいい人達で、居心地も雰囲気も良かったから。

「まだ正式に発表されたわけじゃないんだが…」

課長はとても言いにくそうな顔をしている。イヤな予感が当たったと、テンションが下がる私に追い打ちをかけるように、言葉を濁しながら課長は言った。

「普通女子社員はあまり対象にならないんだが…」

「君は実績も評価されてるから…」

「で、どの部署に異動なんですか？」

煮えきらない課長の態度に苛立ちながら尋ねると、予想もしなかった答えが返ってきた。

「いや…転勤なんだ」

「九州の支店に…」

私は言葉が出なかった。九州？転勤？なぜ私が？

「支店長補佐っていう形で、給料も少しは上がる」

「少し遠いが悪い話ではないだろ？」

給料なんかの問題じゃない。九州なんて行ってしまったら、彼に会えなくなる。そんなのありえない。絶対に嫌だ。

「それは決定なんですか……？」

「どうして私が……」

「実績が評価されたんだよ」

「この不景気に給料が上がるんだぞ？」

「行ってくれるよな？」

「期間は……？」

「一応無期限だが、次の契約更新時に異動願いを出すのは可能だ」

無期限…しかも次の契約更新なんて何年後の話だ。転勤なんてしたくない。この町を離れるなんて嫌だ。何より彼に会えなくなる。そんなの考えられない。

けれど実際問題、会社の命令には逆らえない。生活もかかってい

るし、転勤が嫌だという理由で辞めるわけにもいかない。私はこの町を離れなければならないんだ……

彼の笑顔だけが、頭の中をぐるぐると巡っていた。

課長の話によると、正式な発表は今月末で、異動は三月の末になるだろうとのことだった。つまり、来年度四月から私は九州で働くことになる。

私がこの町にいられるのはあと三ヶ月。あと三ヶ月しか彼に会えない。年明けからこんなに絶望感を感じることは思いもしなかった。

今の私には彼がすべてだった。彼に会えることが何よりも幸せだった。彼がいたから仕事だって頑張れた。

私は多くを望んだりしなかったのに。会えるだけでよかった。そばにいれるだけでよかった。それだけでよかったのに、なぜ？どうしてそれさえも奪おうとするのだろう。

独り占めしたいとか、私だけを見てほしいとか、一度だって望んだことはない。ただ好きでいたかっただけなのに。ただ隣で笑っていたかっただけなのに。それさえも許されないというのだろうか。

神様は意地悪だ。好きな人を好きでいることさえ許してくれない。

私は、何か悪いことをしましたか……？

一人残された会議室で、彼を想い、声を殺して泣いた。

第十四話：誕生日

転勤を告げられてからというもの、私はひどく落ち込んでいた。彼と会える時間は後わずか。そう考えると悲しくて仕方がなかった。一生会えなくなるわけではないだろうけど、嫌なものは嫌だ。

友達や恋人なら話は別だ。連絡をとり続けさえすればいいのだから。けれど私達は違う。私が会いに行かなければ、繋がりなんてすぐに途切れてしまう。私のことなんて、すぐに忘れてしまうだろう。私たちの関係は、とても脆いものなんだ…。

忘れたくない。忘れられたくない。心の中で叫ぶ日々が続いていた。

それからの日々、私は仕事に追われていた。今の仕事を片付けないといけない上に転勤の準備も重なり、疲れはたまる一方だった。それでも私は水族館へ行った。後わずかの時間を、無駄にしたいなかったから。疲れなんて彼に会えば一気に吹き飛んでしまう。今は何よりも、彼に会っておきたかった。会えるうちに、何度でも会っておきたかった。

彼の笑顔を、声を、姿を、すべてを、目に焼き付けておきたかった。いつでも思い出せるように…。

その日、年が明けてから初めて彼に会った。

「久しぶり！」

彼は、いつもと変わらない笑顔と、優しい口調で言った。

「お久しぶりです」

私も精一杯の笑顔でそう言った。けれど、見抜かれていた。

「なんか元気ないね」

彼はいつも、何もかもお見通しだ。私の作り笑顔も、曇った顔も、いつも見破られてしまう。いつも、心配ばかりかけてしまう。だ、言えない。作り笑顔の理由は言えなかった。

何度も言いかけた。この町を離れること、もう会えなくなること。けど、言ったところでどうなる？何が変わる？そう思うと、言えなかった。

何も言えないまま日々は過ぎ、刻一刻と別れの日は近づいていた。私の気持ち晴れることは、なかった。

憂鬱な日々が続く中、私はお気に入りのスカートを履いて水族館へ向かった。今日は私の誕生日。もちろん、彼は私の誕生日なんて知らない。デートをするわけでもない。だけど、言ってほしい。ただ一言、おめでとうって。プレゼントも何もいらなから、ただその一言を聞かせてほしい。そんな想いを抱きながら、水族館へと向かっていった。

エマの水槽に着くと、今日もエマはこちらへ泳いできてくれた。私は小さく、エマに言った。

「もうすぐ会えなくなっちゃうんだ…」
「でもそれまではたくさん来るからね」

そう言つと、今にも泣き出しそうになってしまったけれど、必死にこらえていた。今日こそはとびっきりの笑顔で彼に会つと決めていたから。

しばらくすると、いつものように彼がやってきた。

「あのっ……」

私は勇気を振り絞つて彼に話しかけた。彼は優しく微笑みながら立ち止まった。

「私、今日誕生日なんです!」

……しまった。完全に言うタイミングを間違えた。イキナリすぎる、しかもだから何なんだって感じになってしまった。あまりにも緊張しすぎて自分でも訳が分からなかった。私はいつも空回りだ。

でも、彼は笑ってくれた。そして、言ってくれた。

「おめでとう!」

彼はおもむろに作業着のポケットに手を入れた。

「あゝ…何もあげるのないや」

彼はおどけた様子でそう言つて、笑った。つられて私も笑った。

彼は本当に優しい人だ。改めてそう思った。いつも私を笑顔にしてくれる。どんな時も…。

彼が祝ってくれた誕生日は、今までで一番の誕生日だった。

プレゼントもケーキもなく、パーティーもなかったけれど、一番嬉しい言葉をもらったから。

プレゼントなんていらなかった。彼に会えるなら、それだけでいい。彼が笑っていてくれるなら、それだけでいい。

私は何もほしくない。ただ、彼と笑い合いたい。

だからお願い。

もう何も奪わないで。

最後まで笑っていたいから。

第十五話：お兄さん

厳しい寒さの続く二月、この町にいられるのもあと約二ヶ月。私の気持ちは、依然として晴れることもなく、日々は過ぎた。

その頃、私はある想いを抱くようになっていた。

- 彼と写真が撮りたい -

たった一枚でいいから、彼の写真がほしい。写真があれば、いつでも彼の笑顔に会えるから。

だけど問題は、私が彼にそんなことを頼めるかどうかだった。ただでさえチキンな私が、そんなこと言えるだろうか。そもそも急に写真撮りたいなんて言ったら不思議に思われる。そんなことばかり考えてしまい、結局写真を撮ることは出来ずにいた。

そんなある日。写真を撮ることを半ば諦めかけた頃、絶好のチャンスが訪れた。

彼とお兄さんと三人きりになった瞬間、今しかないと思った。ここで言わなければきっと後悔する。私は勇気を振り絞った。

「あのっ……」

「写真…一緒に…」

文章にこそ出来なかったけれど、私にしては頑張った方だ。

しかし、神様は私にとことん意地悪だった。

♪ピンポンパン……

《アサノさん、至急事務室までお願いします…》

間の悪い館内放送によって彼は呼び出された。

「あ……」

三人が声をそろえて間抜けな声を発した。

「ごめんね…」

申し訳なさそうな顔をして、彼は走り去った。

私の勇気と願いは、粉々に砕け散った。ああ、私は写真を撮ることさえ許されないのか、と果然と立ち尽くした。

その場に残ったお兄さんも、申し訳なさそうな顔をしていた。

「写真、撮りたかったの？」

お兄さんにそう聞かれた瞬間、今まで堪えていたものが一気に溢れだした。

私は大粒の涙を流しながら、お兄さんにすべてを打ち明けた。

九州に転勤になること、三月末までしかいられないこと。そして、今まで秘めてきた想いのすべてを吐き出した。本当はずっと、誰かに聞いてほしかったのかもしれない。誰かに言いたくて、でも言えなくて、私の胸はきつと、パンク寸前だった。

お兄さんは、頷きながら聞いてくれた。

そして優しく言った。

「だから写真、撮りたかったんだね」

「俺、知ってたよ。君がアサノさんを好きなこと」

「君のこと見てたら、純粹にアサノさんを想ってるのがよくわかる」

「俺からは何も言えないけど、アサノさんもそれはよくわかってるよ」

私は泣きながら、頷くのが精一杯だった。

「でも、アサノさんには言った方がいいよ、転勤のこと」

「何も言わないまま君が来なくなったら…」

「きつと淋しがるから」

私は涙でグシャグシャの顔を上げ、お兄さんを見た。

「一生会えなくなるわけじゃないんだし」

お兄さんは優しく笑ってくれた。

「でも私泣いちゃうから…」

「アサノさんに迷惑はかけれない…」

「じゃあ俺から言おうか？」

「本当は自分で伝えるのがいいんだけど…」

私は首を縦に振った。彼の前で涙は見せない。彼の前で泣いてしまえば、それは彼にとって重荷にしかないから。

「ごめんなさい…迷惑かけて…」

「気にしないで！」

お兄さんとはびっきりの笑顔で言ってくれた。

そして、彼にはなるべく早いうちに伝えると約束してくれた。

「今日はもう帰りな」

「そんな顔アサノさんには見せれないだろ？」

冗談混じりにそう言つと、お兄さんは私の肩をポンと叩いて言つた。

「大丈夫」

何が大丈夫なのかはよくわからなかったけれど、その言葉を聞いたとき、心が軽くなったような気がした。

今まで思い詰めすぎていた気持ち、楽になった。

そう、大丈夫なんだ。私は大丈夫。私はまだ笑える。また彼の前で、笑える。

第十六話：涙

お兄さんに打ち明けてから数日、私は水族館へは行かなかった。

本当はすぐ彼に会いたかったけれど、少し気持ちの整理が必要だと思った。気持ちの整理をして、スッキリしてからじゃないと、きっと上手くは笑えない。もう彼の前で作り笑顔はしたくないから。

私はこれからどうすればいいのか、どうしたいのか、一生懸命考えた。答えが出ることはなかったが、一生懸命悩んだ。考えても何もわからなくて、悩んでも何も変わらなかった。

悩んでいる間に思ったこと。それはただひとつ。彼に会いたい。素直にそう思った。

きつと、それが一番大切なことなんだ。残りの二ヶ月くらい、自分の気持ちに正直に過ごしたい。それが私の出した答え。

そして私は、水族館へ向かった。今なら純粋に笑える。

数日ぶりに訪れる水族館は、なんだか私を待っていてくれたような、そんな気がした。

そして私は、まっすぐにエマの水槽へと向かった。珍しく、彼は水槽の中で作業をしていた。

そういえば、彼を初めて見たのも水槽の中だった。あの時は、彼

を好きになることなんて全く予想もしていなかったのに。

久しぶりに見た、エマと泳ぐ彼の姿。仕事が忙しくて、久しくエマのショーも見れていない。そうだ、次のショーは絶対に見に来よう。エマと泳ぐ彼の姿が一番好き。一番輝いて見えるから。

しばらくエマと彼の姿を眺めていたが、いつの間にか水槽の中に彼の姿はなかった。彼がいなくなった後も、私は考え事をしながらぼんやりと水槽の中を見つめていた。

すると今度は目の前に、いつもの作業服を着た彼が現れた。彼はいつものようには笑わなかった。

「あ…こんにちは」

ちゃんと笑うと決めたのに、彼の真剣な表情に圧倒され、やっぱり上手くは笑えなかった。

彼はほんの少し微笑んでくれたけれど、いつもの笑顔ではなかった。私は下を向いてしまった。彼に何を言えばいい？どんな話をしたらいい？必死に言葉を探していると、彼が先に口を開いた。

「九州……行っちゃうんだって？」

「……………」

「……………はい」

お兄さんは約束通り、彼に伝えてくれたんだ。

「そっか……」

「……………はい」

「でも、休みになったら来てね」

「待つてるから」

「……………はい……」

私は声が震えていた。返事をするのがやっとだった。彼が今どんな顔をしているのか、どんな表情で話してくれているのか、それさえ見れなかった。きっと今彼の顔を見たら泣いてしまう。

彼は今、どんな気持ちでいるんだろう。ほんの少しでも、淋しいと思ってくれているかな。ほんの少しでも、悲しんでくれているかな。少なくとも、私にはそう感じた。勘違いだと思われても、思い上がりだと言われても、私にはそう見えた。

それが、嬉しかった。

しばらく沈黙が続き、彼は仕事に戻らなければならぬと言った。私は小さく頷いた。

そして、彼は言った。

「本当は……」

「行かないでって言いたんだけど……」

その瞬間、私の瞳からは大粒の涙がこぼれ落ちた。
彼の前では泣かないと決めたのに。ただ、ただ涙が溢れて止まら
なかった。

本当は、一番言っただけだった言葉。他の誰でもない、彼に、そ
う言っただけだった。

そんな言葉を、彼は言ってしまった。もうだめだよ。これ以上、
私を泣かさないで。これ以上、好きならせないで。

彼はそれ以上何も言わなかった。何も言わずに、私の涙を見つめ
ていた。

私には、彼の言いたかったことがわかった気がした。

『行かないでって言いたんだけど…』

『でも俺には言えない』

私には、そう聞こえた。

彼が去った後も、涙が止まることはなかった。

エマは、いつものように泳いでいた。初めて彼と出会った、あの
日のように。

第十七話：写真

その後も私はしばらくその場を離れられなかった。ただぼんやりと、エマを見ていた。

そしてまた、彼が現れた。私は何も言えずに黙りこくっていた。彼もまた、黙っていた。

私にはもう、わかつていた。気のせいでも勘違いでもなく、彼にとっても、この“別れ”は特別なことなんだと。

私はもう逃げない。彼からも、この現実からも。

「さつきは…ごめんなさい」

「泣いたりして…」

私がそう言っていると、彼は微笑みながら首を横に振った。それからそっと呟いた。

「写真…撮ろっか」

覚えててくれたんだ、私が写真を撮りたいって言ったこと。私は嬉しかった。私のわがママを、彼はいつも叶えてくれる。

私がぼんやりしていると、彼は笑っていた。なんでぼけっとしてるんだ、とでも言いたそうな顔をしながら。

「おいで！」

彼はそつと私の手を取り、エマの水槽の前に立った。そして近くを巡回していたお兄さん呼び止め、写真を頼んだ。

「エマも入れてくれよ！」

はいはい、と言いながらお兄さんはカメラを構えていた。

「いいねえ、なかよさそうで！」

お兄さんにひやかされながらも、私は精一杯の笑顔で立っていた。最初で最後の、彼との写真。きつとずっと、私の宝物になる写真。彼の隣で、一番の笑顔で写りたかったから。

写真を撮り終わり、カメラを私に帰そうとしたお兄さんは、小さく言った。

「よかったね」

私はとびっきりの笑顔で頷いた。それが私の、お兄さんへのありがとうだから。

お兄さんにはいつも助けてもらった。いつも私達を見守ってくれた。感謝してもしきれないくらい。本当に、ありがとう。

数日後、写真ができあがった。

私と彼の、たった一枚だけの写真。後ろではエマが楽しそうに泳いでいる。

写真の中の彼は、とても優しい瞳をしていた。

私はいつも照れくさくて、彼の瞳をしつかり見れないから、こんなに澄んだ瞳をしてるなんて知らなかった。

彼の隣の私は、ぎこちない笑顔だけれど、とても幸せそうに笑っている。

彼の隣にいたときが、一番幸せ。一番、幸せなんだ。

私はたった一枚の写真を胸に寄せ、泣いた。

わかってる。わかってる。もう逃げないと決めた。

だけどやっぱり、彼のそばにいたい。

もっともっと、彼の笑顔のそばにいたいよ…。

第十八話：“最後”

それからの日々はあつと言う間だった。引越しの日を二日後に控え、とうとう彼に会える最後の日がやってきた。もう三月も終わりだというのに、その日は朝から冷え込んでいた。

私は水族館へ向かった。いつもと変わらない、いつもの水族館。エマは気持ちよさそうに泳いでいた。

「エマ、今日でお別れだよ」

「でも、きつとまた来るからね」

エマにはとても感謝している。エマがいなければ、私がこの水族館へ通うことも、彼と出会うこともなかった。エマがいてくれて、よかった。

そしてエマはショーのリハーサルへと向かった。水槽の中には彼とお兄さんがいた。この水槽の中で泳ぐ彼を見るのも、きつとこれが最後。別れの時間は、刻一刻と迫っていた。

夕方になると、風が強くなってきた。三月とはいえ夜はまだかなり寒い。私は冷えた手をこすりあわせながら、いろんな事を思い出していた。

初めて話したときのこと、名前を呼んでくれたこと、手をつないだこと、ケンカしたこと……

沢山のことがあった。この水族館には、数え切れない思い出がある。この場所で過ごした日々を、私はずっと忘れない。

私は、ショーのチケットを握りしめ、最後のショーを待った。

ショーの時間が近づいてきた頃、雲行きが怪しくなった。私は嫌な予感がした。屋外のショーのため、悪天候では中止の場合もある。雨が降っていないのが唯一の救いだ、今日は一段と風が強い。

- お願ひ、お願ひ... -

私は祈ることしかできなかった。

- これが最後のの -

- 中止になんてしないで -

彼の姿を、エマの演技をどうか私に見せて...

そんな願ひも虚しく、場内を中止のアナウンスが鳴り響いた。

神様はそんなに私のことが嫌いなのだろうか。最後くらい、いじわるしなくてもいいじゃない。

これが、最後だったのに.....

これで、終わり。これで終わりなの？

違う、きつと違う。最後なんかじゃない。終わりなんかじゃない。

最後じゃないから見れなかったんだ。また見においでって、そういうメッセーじなんだ。これが最後じゃないんだよって、あの風は

そうだったんだ。

私は自分に言い聞かせた。

そして、彼が会場から出てきた。

今日が終わると、しばらく会えなくなる。次は、いつ会えるんだろう。

やっぱり、今日はショー見たかったよ……。

私は俯いたまま、立ち尽くしていた。

「ごめんね……」

申し訳なさそうに彼は言った。私は、泣いてしまった。

「風邪…… ひかないでね」

そう言って彼は行ってしまった。

私はその場で泣き続けた。

彼は悪くない。彼のせいじゃないのに。謝らないで……謝らないでよ。

最後まで、気を使わせてしまった。最後まで、泣いてしまった。

ごめんね。ごめんね。

私は、夜空を見上げた。強い風の中、星は瞬いている。

「エマ、ばいばい」

「さようなら……アサノさん」

小さく呟いて、涙を拭いた。

「またね……」

第十九話：離ればなれ

それから二日後、私はこの町を離れた。大好きな町、大好きな水族館のある町、彼がいる町……

次はいつ来れるかわからない、だけど、私はきつとこの町に戻る。また彼と笑い合うために。

そして四月。引っ越しの片づけも終わり、私の新しい土地での仕事が始まった。慣れない土地や新しい仕事に戸惑いながらも、私は仕事に励んだ。

けれど、仕事が終わって家へ帰ると、急に淋しくなり、一人泣いては彼を想った。

休日には外出する気も起きず、家で過ごすばかり。一人の時間に考えることは、彼のこと。

元気でいるかな、つらいこととかないかな、私のこと……まだ忘れてないかな……

そんなことを考えては、ため息をついた。

でるのはため息と涙ばかり。ここへ来てから、笑ったことなんてあっただろうか。

会えないことが、こんなにも苦しいことだったなんて。遠くにいることが、こんなにもツライことだったなんて。

だけど、頑張らなきゃ。頑張るって決めたんだから。

そうだ、夏には有給を取って彼に会いに行こう。夏になったら、彼にまたいっぱい元気をもらうんだ。笑顔を貯めにいくんだ。

私は前向きに物事を考えることにした。俯いてばかりはいられない。そんなんじゃないつまでたっても笑えないから。

それでも、わかっていても、彼を想うと苦しくて仕方がなかった。涙を流さずにはいらなかった。

このまま彼を想い続けていていいのだろうか…
決して報われることのない恋を、私はいつまで続けるのだろうか…

家に帰ると、私は去年の手帳を取り出した。

- 去年の今日…… -

- 初めて彼に逢った日だ…… -

彼と出会ってちょうど一年。もう一年が経った。

一年って早い。まだ一年しか経ってない。なのに、もう離ればなれになってしまった。

「早すぎるよね……」

そう呟き、手帳を閉じた。

私はまだ、彼が好き。どうしようもない思いだけど、仕方がない。私は彼が好きなんだ。

今はまだ、忘れる事なんてできない。まだ、好きでいたい。彼を好きでいることが、今の私のすべてだから……。

それから二ヶ月が経ち、梅雨の時季を迎え、私は会社に夏期休暇願いを出した。

が、あっけなく却下されてしまった。配属されたばかりで夏期休暇なんてもつてのほかだと、説教までされた。

ほんの三日、いや、二日でもいい。二日あれば、土日の休みと併せて四日間手に入る。たったの二日でもいいのに……

支店長は耳を貸そうともしてくれなかった。

結局、支店の中で唯一私だけが夏期休暇を取れなかった。

- 不公平すぎる…… -

そんな不満をぶつけることもできず、私は会社の指示に従うしかなかった。

- 彼に会えない -

楽しみにしていた夏。彼に会えないのなら、夏なんて来なくていい。

私は彼との写真を見つめ、また一人涙を流した。

どうしてこうもうまくいかないのだろう。私の願いは、何一つとして叶わない。

彼に、逢いたい。

思うことは、いつもそれだけ。たっ た、それだけのことなのに。

第二十話：仕事

そして、夏がきた。彼に会えない夏。心待ちにしていたのに、今は虚しいだけだった。

私は仕事に励んだ。朝から晩まで必死で仕事をした。とにかく忙しくしていたかった。忙しくしているうちは、何も考えなくて済むから。

今の私には、それしかなかった。そうすることでしか、この夏は越えられないと思っていた。

そうしている間に、夏は過ぎた。休みもほとんどないほど働いたから、少し痩せた。

けれど、いつまで経っても休暇をもらえる気配はなく、私は途方に暮れ、仕事も嫌になってきた。

元々、好きでこの仕事を始めた訳じゃない。なんとなく、就職しただけ。生活するために働いているだけ。仕事には、やりがいも生き甲斐も感じない。それなのに、転勤させられ、今の支店ではこき使われ、支店長の小言に耐える日々……私は、一体何をしているんだろう……

そばにいられない人を想い続け、嫌々働いて、夢なんてなくて、将来への希望もない。私って、なんてちっぽけな人間なんだろう……

いつからか、私は後ろ向きな考え方しかできなくなっていた。

前の私はそうじゃなかった。

夢なんてない、将来への希望もない、仕事だって好きじゃない。だけど、それでもよかった。それでも私の毎日は輝いて見えた。それは彼がいたから。

彼がいて、彼が好きで、彼に会うためにオシャレをした。彼に会えると思えば、仕事だって頑張れた。それが私のすべてだった。

それがなくなれば、こうなること……わかってたのに。

どうせ好きでもない仕事なら、辞めてでもあの街に残ればよかった。まだ若いんだから、仕事なんていくらでも見つかるのに。

私がつと、賢かったら。私がつと、強かったら。きっと今もあの街にいられただろう。きっと今も、彼と笑っていられただろう。たとえ手には入らなくても。

- 私はバカだ…… -

涙をこらえ、仕事をした。負けそうでも、負けちゃいけない。

- ちゃんとやらなきゃ、また怒られる…… -

“怒られないように”仕事をする。今の私には、それが精一杯だった。

そんなある日、私は支店長に頼まれ、買い出しに行った。

- これってただのおつかいじゃない… -

私はぶつぶつと文句を言いながら、早々に買い出しを終えた。その帰り道、郵便局の前を通りがかった。すると、あるポスターが目に入った。

そのポスターには、こう書かれていた。

《手紙で伝えませんか?》

《大切な思い、大切なあの人へ》

- 手紙… -

私は立ち止まり、じつとそのポスターを見つめていた。

手紙を、書きたいと思った。そうだ、手紙を読めば、私のこと思っ
い出してくれる。忘れないでいてくれるかも知れない。

私は、とても小さな、ほんの僅かな光を見つけた気がしていた。
いつも感じていた胸のときめきを、少しだけ、取り戻せたような…
…そんな光を。

第二十一話：手紙

事務所へ戻ると、支店長はまた小言を言ってきた。けれど、そんな小言はもう、耳には入らなかった。

私の頭の中は、手紙のことばでいっぱいだった。

- 何を書こう... -

- どんな風に書いたらいいんだろう... -

その日は一日中、手紙のことばかり考えていた。

家へ帰るとすぐに、レターセットを取り出した。手紙を書くのなんて、久しぶり。私は少し、いや、かなりの緊張で手が震えていた。

私は思いのままに書いた。何度も何度も書き直しながら。彼に伝わるようにと、祈りながら。

【アサノさんへ】

【突然手紙なんて書いてしまってごめんなさい。】

【あれからもう半年が過ぎましたが、私のこと、まだ覚えていますか？】

【私は今、九州にいます。】

【毎日頑張って仕事をしています。】

【本当は夏には水族館へ行くつもりだったのですが、仕事の都合で行けませんでした。】

【次はいつ行けるのか、まだわかりません。】

【私はいつも、エマに沢山元気を貰っていました。】

【私は水族館へ行くのが楽しみで毎日を過ごしていたから、今は寂しい気持ちが強いです。】

【アサノさんとお話をするのもとても楽しくて、いっぱい笑顔になれました。】

【早くまた、エマのショーを見たいです。】

【アサノさんとお話できるのも、楽しみにしています。】

【これから頑張ってくださいね。】

【応援しています。】

【ミワコ】

手紙を書き終えたとき、私の目には涙が溢れていた。

下手な文章しか書けなかったけれど、これでいい。もっともっと書きたいことはあったけれど、今の私にはこれしか伝えられない。

一体何が言いたいのかわからない、そんな風に思われるかも知れない。でも、それでもかまわない。

私が伝えたかったのは、彼への想いだとか、そんなんじゃないかった。

【私はここにいるよ】って、自分の存在を伝えたかった。彼が私を忘れてしまわないように。彼に忘れられることが、それだけが怖かったから。

私は水族館のリーフレットを取り出し、封筒に住所を書いた。

【□□水族館】

【エマ トレーナー アサノさん宛】

- これで届くかな... -

裏には返信用の宛先は書かなかった。彼が返事を書けないように。いや、彼からの返事を期待してしまわないように。

返事なんて来るわけがない。だったら宛先も書かない方がいい。それなら、期待しなくて済むし、何より傷つかなくて済むから。

私はもう、傷つきたくない。傷つくのは怖いから。

だけどきつと、私は間違っていた。

傷つくのを恐れすぎていた。自分を庇いすぎていたんだ。

私がもし、違う一步を踏み出していれば、今とは違う未来があったのかも知れない。

今も、笑えていたのかも知れない...

第二十二話：ため息

次の日、私は出社前に郵便局へ立ち寄った。私はじっと手紙を見つめ、ポストに入れた。

- 無事に届きますように... -

私はため息をついて空を見上げた。穏やかな青空だった。

- あの日もこないいい天気ならよかったのに -

彼と最後に会ったあの日、あの日の曇り空を、私はまだ悔やんでいた。

「お手紙ですか？」

その時、不意に声をかけられた。

振り返るとそこには一人の郵便局員がいた。

「安心してください。ちゃんと届けますから」

局員は優しく笑ってそう言った。

私は少し泣きそうになった。優しい言葉をかけられたのは久しぶりだったから。

「お願いします……」

私は軽く頭を下げ、その場を去った。局員はまた、優しく笑っていた。

その表情は少し、アサノさんに似てるような気がした…。

その後数日、私はため息ばかりついていた。

もう届いたかな…読んでくれたかな…

そんなことばかりを考えていた。

そんな矢先、思いがけないことが起こった。

支店長に呼び出され、また説教か、と思っていると、予想もしなかったことを告げられた。

「また……転勤ですか……？」

一瞬耳を疑ったが、この支店長が冗談を言うはずもなく、私はまたも転勤を告げられた。

「私に、至らないところがありましたか…」

「至らなかったから転勤、ていうのはつまり左遷」

「あなたはそうじゃない」

「あなたは今学ぶ時だから、いろんな土地で勉強しなさい」

言っている意味は分かるけれど、理解できない。
もう…いやだ。

私はまた、会社の命令に従い、転勤するしかないのだろうか。

でも、どっちみち彼に会えないことには変わらない。だったら、どこにいても同じ、何も変わらない…。

私はまた、深いため息をついた。ため息は重く、私の胸を締め付けていた。

第二十三話：災い転じて福と為す

次の転勤先は…沖縄だった。

ああ…また彼から遠ざかってしまう。だけでもう覚悟を決めた。結局私には、会社を辞める勇気なんてない。新しい生活を始めるだけの貯金もない。弱虫な私は、泣き言を言いながら沖縄に行くしかない。

だけど、良い知らせもあった。次の転勤は1月に決まっていたが、転勤の前に一週間、準備を兼ねて休暇をもらえることになった。

やっともらえた休暇。やっと、やっと彼に会いに行ける。

私は嬉しくて仕方がなかった。世の中捨てたもんじゃないな、とにやけたアホ面を振りまいていた。

転勤の日が近づくに連れ、仕事は忙しくなった。けれど、何も苦ではなかった。後少しで、彼に会えるのだから。

そう思えば、頑張れた。

そして、今までの仕事も片付き、引越しの日取りも決まった。後は水族館へ行く日程を決めるだけ。私は弾む気持ちを抑えきれずにいた。

私は仕事の合間に水族館の営業時間を調べることにした。

「えーっと……」

「12月の末頃は…」と

「…は？」

私はパソコンの画面を見つめながらポカンとした。

「12月の休館日は未定です」

「尚、イルカのエマショーについても開催事項等は未定です」

「詳しくは□□水族館事務局までお問い合わせください」

なんなんだ、このアバウトな感じは。これじゃ調べた意味がない。そもそも未定なんてあり得ない。まあ、年末だから仕方がない。

でも、休館日と重なるのは避けたい。日程の調整には入る前には決定していることを願った。

数週間後、私は再び水族館のホームページを開いた。…が、休館日、エマのショー共に未だ「未定」のままだった。

・明日新幹線の切符買いに行くのに、どうしよう…・

イチかバチか、賭けに出るか…でも、最後の日にみれなかったエマのショーだけは、どうしても見たい。それだけは、賭けではなく、確実にしたい。

私はある文章をじっと見つめた。

「詳しくは□□水族館事務局までお問い合わせください」

・問い合わせ…してみようかな・

私は電話に目をやった。電話してわかるのなら容易いことだ。私はそっと受話器を取った。

受話器を握りしめた途端、胸の鼓動が早くなるのがわかった。私は深く深呼吸をして、プッシュを押した。

トゥルルルル……トゥルルルル……

受話器の向こう側で呼び出し音が鳴る。緊張がピークに達した、その時。

ガチャ、

『はい、□□水族館事務局です』

電話に出た声は、聞き覚えのある声だった。

『もしもし?』

「あ、あ……あの……」

私はもう一度、深呼吸をした。

「あの、私……ミワコです」

「覚えて……ますか?」

『あー……ミワコちゃん!』

『もちろん覚えてるよ！元気？』

受話器の向こうからは、相変わらず元気そうなお兄さんの声がしていた。

久しぶりのお兄さんの声にホツとしながらも、胸の鼓動は速まるばかりだった。

『で、どうしたの？』

「あ、あの…私…」

「今度遊びに行くことになって…」

「で、ホームページ見ても詳しく載ってなくて…」

自分でも何を言ってるのかわからなかった。けれど、お兄さんは相変わらず私の良き理解者だった。

『あゝ…いつ来る予定？』

「12月の最後の週あたり…」

『12月の末……か。ちょっと待ってて』

『詳しい日程は？もう決まってるの？』

「あ、え…と、まだ…」

『そっか』

『エマのショーは毎週やってるし、都合つけておいでね』

「あ…！じゃあ、じゃあ…」

「最後の週、12月の最後の週の金曜日からにします！」

「金土日にする！」

また私は突拍子もないことを言ってしまった。お兄さんは笑った。

『またすっごい年末に（笑）』

『オッケー！アサノさんもきつと喜ぶよ』

『いつも、ミワコ元気かなーって言ってるし』

私は、心臓が止まるかと思った。お兄さんは、嘘じゃないよ、と小さく言って、また笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9324a/>

また、会えるよ。

2011年10月3日13時26分発行